

★かき消された米ロの核削減条約の延長合意＝グレン・グリーンウォールド

トランプ米大統領とロシアのプーチン大統領が7月16日、ヘルシンキで首脳会談をおこなった。会談に入る前の写真撮影でトランプ大統領は次のように発言した。

「両国にとってとても良い機会だ。率直に言って、両国関係は長年にわたってよくなかった。私は大統領になってさほど長いわけではない、やっと2年になろうとしているところだ。しかしこれから特別の関係を築いていける、私はそう願っている。何年も前からいつてきた。選挙戦でもロシアとの関係がうまくいくのは良いことで悪いことではないといつてきた。世界もそう願っているとおもう。両国は核大国だ。90%の核兵器を保有している。それはよいことではない。悪いことだ。それについて何かしたいと思っている。それ（核兵器）はポジティブな力ではなく、ネガティブな力だからだ。これから他のことともに、それを話し合う」。

両首脳は、2021年に期限切れをむかえる新戦略兵器制限条約（START）の延長で合意した。ところが直前のNATO首脳会議でトランプ大統領が欧州諸国を批判、さらに米大統領選介入疑惑を巡り連邦大陪審がロシア軍情報部の当局者12人を起訴したのに、会談でトランプ大統領がロシア擁護の発言をしたこともあって、欧米メディアや政界から大きなトランプ批判がおこり、炎上した。米独立系メディア「デモクラシー・ナウ」が首脳会談をどうみるかについて討論番組を報道（7月16日）。そのなかで国際ジャーナリストのグレン・グリーンウォールド氏が、ロシアを「犯罪国家」ときめつけて危機意識を煽るメディアや右派勢力の策謀にのせられてはならないと警告した。以下は、「プーチンのような殺人独裁者にこびへつらうのは米国の歴史にとって前例のないことで極めて危険だ」と強調した論者に反論したグリーンウォールド氏の発言の概要。

首脳会談は素晴らしいものだった。2007年の大統領予備選選挙のとき、オバマは大統領になったら北朝鮮やキューバやベネズエラの指導者と会うのかときかれて、だれとでもあるとこたえたが、ヒラリーは、独裁者のプロパガンダに使われるだけだと否定した。そしてリベラル勢力はオバマを支持した。指導者たちと会うことは孤立させたり無視したりするよりもよいことなのだ。レーガンがゴルバチョフと会うことをきめたときも、極右派たちは攻撃の大宣伝をした。いまと同じように、愚か者だとか、侵略や国内の抑圧を正当化するソ連とクレムリの宣伝に使われるだけだと批判した。プーチンは権威主義的で抑圧的なことは間違いないが、米国の親密な同盟国にはもっと抑圧的な国もある。UAEやサウジなどはワシントンのシンクタンクにたくさ

ん基金をだしている。もっとも重要な問題は両国が90%の核兵器を保有していることだ。両国が背き合って、国際紛争や誤診の危険をおかすよりも、仲良くするようがはるかによいのだ。

ロシアによる大統領選挙介入のフィッシングは「米国への最大の脅威」だとするレトリックが際限なく広がっている、あたかも9・11のように話されているが、狂気の沙汰だ。長い間、国家安全保障局（NSA）の機密文書を調べたが、米国もロシアの諸機関に毎日のようにフィッシングをやって介入している。この問題を米国の民主主義への存亡の危機のようにいうのは、ブッシュ政権がアルカイダについて使ったレトリックと同じだ。オバマ政権はロシアがクリミア併合したあとも9・11のような扱いはしなかった。ロシアの経済は世界で7位か8位でイタリアと同じかそれより低い。米国への脅威ではない。立派な指導者をもつことにこしたことはないが、問題は、両国が話し合いをして違いを平和的に解決することだ。米国がサイバー攻撃にたいして何もしていないなんてことはない。情報調査に毎年700億ドルも使って、その大部分がNSA予算だ。問題がおきてから6カ月、オバマがやったのは数人の外交官を追放し部分的な制裁を課したくらいで、米国の民主主義への重大な脅威だなどと考えるはいなかった。

（中略）

米国のシンクタンクはアラブ首長国連邦など人権抑圧国から金をもらっているし、政府は抑圧政権とも取引をしている。米国の政府だとしてときとして抑圧的になる。イラクを破壊したし、拷問もした。まだグアンタナモに刑務所をおいて、17年も未決囚を投獄している。人権侵害をしている国とも取引しなければならないし、米国自身の政府も人権侵害をしている。他国と対話をするのが人権問題を正当化するなどというレトリックは右派が何十年にもわたってソ連との平和交渉を違法にするために使ったものだ。終末時計は2分前で1953年以来最悪だ。核の脅威から離れるために米ロの対話がもっともおこなわれることを願いたい。話し合いが裏切りだとか危険だとかいうレトリックはもうやめにしよう。

（中略）

ロシアへの協力という点では、オバマの方がトランプよりはるかに協力的だった。トランプはウクライナに致死性兵器を送ったが、オバマは拒否した。トランプはシリアを爆撃したが、オバマは慎重だった。ロシアを刺激したくなかったからだ。トランプはロシア外交官を追放しオルガルキに制裁をかけ、イランとの核合意を反故にした。オバマはロシアと協力して合意を作った。トランプがプーチンの操り人形のようにい

うのは、トム・克蘭シーの小説の読みすぎで、事実とかけはなれたものだ。たしかにトランプはプーチンを批判しない。しかし彼が批判しないのはプーチンだけではない。イスラエルのネタニアフもサウジアラビアの指導者たちをも批判したことがない。フィリピンのトテルテも批判しない。それは問題だけど、プーチンだけではない。

NATOやEU, WTOといった国際機関はこれまで批判の対象外だったが、それらが多く諸国の勤労階級の人々を悲惨な目に合わせた。なぜ米国にトランプが現れ、欧州に極右が台頭しているかを理解しようとするなら、長い間神聖だったこれらの諸機関が本当に米国のためになってきたのかどうかを問い始める必要がある。その根本原因、つまり、これらの諸機関が金持ちの利益のために何千、何億という人々の経済と未来を破壊しているという事実を明らかにしないかぎり、さらなるトランプが出現するだけだろう。

(注) 新START条約 1550 発まで削減する目標。2021年に期限切れ。延長に議会の承認は不要。

(以上)